

テキスト	ルカによる福音書 1章26～38節
参照教理問答	子どもカテキズム 問22 ウェストミンスター小教理問答 問22

〈聖書テキストの解説と黙想〉

①テキストの概要

ルカによる福音書1章26～38節はクリスマスの時期に教会学校や主日の礼拝でよく読まれる箇所である。救い主、イエス・キリストの誕生が予告され(31節)、イエス・キリストがどのようなお方かが明らかになる(32,33節)。そして戸惑いながらも神様の言葉を信頼するマリアの信仰(34～38節)が示され、キリストの誕生へと物語は進む。イエス・キリストの誕生、キリストの使命、神の言葉に応答する信仰者。この箇所においてはこうしたクリスマスの本質を知るのに恰好のテキストだといえるだろう。

②天使ガブリエルと処女降誕

しかしながら、このテキストにはいくつかの難しさがある。一つは、天使ガブリエルの存在である。この天使をどのように考えるのか。小さい子どもならば、そのまま受け入れてくれるだろうが、年を重ねるごとに天使という存在そのものに懐疑的になってくるだろう。もしくは、テレビやゲームによって描かれている聖書とは似ても似つかない天使をイメージする生徒もいるかもしれない。また、処女降誕という超自然的な出来事についても、子どもにどのように話せば良いのか、難しい問題である。処女降誕はキリストのご性質である無罪性、神であり人である二性一人格といった教理を考える時に非常に重要な教えである。しかしながら、ことがそれ自体は容易に説明ができるものではない。天使にしても、処女降誕にしてもこうした問いに理想的な答はないだろう。しかし、ひとつ考えられるのは、理屈によって天使の存在や処女降誕を信じるように説得するのではなく聖書に記されている事実を、淡々と確信をもって語ることはないだろうか。天使にしても処女降誕にしても常識的にいえば信じることは困難であ

る。これらのことを子どもたちが受け入れるとすればそれは聖霊なる神の働きである。聖霊の働きに期待し、委ねる。そのためにも御言葉に集中して子どもたちの反応を必要以上に気にすることは避けたい。教師の皆様方が確信をもって語る姿をもって証しとしていただきたい。

③解説

(1) エリサベトとマリア

ルカ1:26～38節は前の段落(1:5～25)と密接な関係がある。1:5～25の段落においては不妊の女であったエリザベトに後の洗礼者ヨハネとなる男の子の誕生が予告される。その出来事を受けて、主イエスの誕生の予告がマリアに告げられる。エリサベトは高齢での出産であり(1:18)、マリアは男性を知らずしての出産である(34節)。エリサベトの出産は非常に困難なものであるし、マリアの出産に至っては生理的には不可能なものである。しかし、この両者にいと高き方の力(35節)が及んだ。今回の説教は前段落と連続していないので、エリサベトの話をする必要はないかもしれない。しかし、エリサベトの身に起こった出来事も踏まえた上で、いと高き方の力について思い巡らしたい。

(2) 天使ガブリエルの訪問

冒頭の「六か月目に」という言葉とガブリエルの登場は前述のようにイエス・キリストの誕生と先行する物語を結びつける。ヨハネ誕生の予告から6か月目にガブリエルはナザレに遣わされたのである。ガブリエルは老女エリサベトとは異なりおとめであるマリアのところに遣わされる。マリアはダビデ家に属するヨセフと婚約していた。当時のユダヤでは、婚約とは同居はしていないが実質、夫婦であった。ヨセフがダビデ家の出身であることはヨセフの子どももダビデ王家系に属することを意味している。

(3) 天使の挨拶と戸惑うマリア

マリアのもとに遣わされた天使は「おめでとう、恵まれた方」と語る。後続する「主があなたと共におられる」を強調している。この2つの言葉はマリアが特別に選ばれた人物であるという点を強調している。マリアは、天使そのものに戸惑ったということよりもむしろ、その言葉の意味について戸惑った。当時、男性が女性に対して「主があなたと共におられる」とあいさつすることはなかったからである。

(4) イエス・キリスト誕生の告知

戸惑うマリアに対して、天使は「恐れることはない」(30節)と語る。そして、マリアに対するメッセージを語る。このメッセージは4つに分けることができる。①彼女はイエスという名の息子を得る(31節)。イエスとは、ヘブライ語ヨシュアがギリシャ語化したもので、「神は救い」という意味。②その子は神の子である(32節、いと高き子とは天地創造の神のこゝ)。③彼はダビデの王位を受け継ぐ(32, 33節。この点については後述)。④その子の誕生は聖霊が彼女の上に降ることによってもたらされる。そして、いと高き方の力がマリアに臨む(35節)。ゆえに、このお方は聖なる者、神の子とよばれる。このようにして、この不可解な妊娠が何よりも神の主権によってなされることを示し、おとめマリアの妊娠と生まれてくるイエス・キリストが神の子であることを強調する。このようにルカは非常に丁寧かつ慎重にマリアの妊娠の意味とそれがもたらすものを丁寧に述べる。これらのことが起こるしるしとして、不妊の女エリサベトへの言及がされている(36節)。それは「神にできないことはなにもない」(37節)ことの証明でもある。

(5) ダビデの王座

イエス・キリストがこの地上に来てくださった意味はなんだろうか。キリストの業の中心点は十字架と復活である。しかしながら十字架と復活については福音書が進むにつれて明らかになっていく奥義である。マタイ福音書のクリスマス物語ではこのお方が罪からの救い主であることが告白

されているがルカ1章ではより積極的にこのお方がダビデの王座を頂くということが予告されている(32節)。クリスマスということで、キリストの到来の意味を語ることはふさわしいことである。そしてそれは「ダビデの王座を受け継ぐ者」としてこの地上にきてくださったことを覚えたい。

「ダビデの王座」とは何か。これを知るためにはナタン預言と呼ばれるサムエル記下7:12~16節を知ることが重要である。ナタンはダビデ王にダビデ王の子孫がダビデの王国と王座をとこしえにすると預言した。王は神様から民を治めることを委ねられた者である。王の働きは神様のご支配を見える形で代行することにある。その中には罪からの救いも含まれるし、さらに救ったものをきよめていく働きも含まれる。こうした王としての働きを確固たるものにしたのがイエス・キリストである。現代の教会に集う一人一人もこうした主イエスの王座に連なるものである。

(6) マリアの信仰

マリアが天使とのやりとりで、どこまでその意味を悟ることができたのかは明らかではない。しかし彼女はその言葉に戸惑いながらも、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(38節)と天使に告げた。こうしたマリアの信仰に思いを馳せたい。プロテスタント教会においてはカトリック教会に対するアレルギーからか、マリアの信仰についてあまり積極的に語られないのかもしれないが、マリアの御言葉への従順は深い。こうした態度を心に留めておくことは大切である。もちろん、こうしたマリアの信仰もマリア個人の資質もさることながら、聖霊の賜物だと考えたい。

マリアのように主の御前に頭をたれ、御言葉がその通りになりますようにという信仰を子どもたちに共に分かち合いたい。それは、「恵まれた」ことであり、主が共にいてくださるということである。聖霊に生かされるということは、まさに、御言葉に従いながら、日々を生きることである。

(小宮山裕一)

テキスト ルカによる福音書 1章26～38節
子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

クリスマスを前にして、イエス・キリストの母であるマリアに告げられた告知とマリアの信仰に目を向けたい。ガブリエルから与えられたメッセージの中身を深く探れば、イエス・キリストがこの地上に来てくださったことの意味を深く探るクリスマスメッセージとなる。それと共に、マリアの信仰に目を向けるならば、神の御言葉に謙虚に信頼する信仰者としての決心を促すことになる。このどちらかに特化することも可能であるし、特にクリスマスのメッセージなので前者に焦点を当てても良い。しかしながらこの両方がマリアの身におこっていることなので、この両方について考える時としたい。イエス・キリストがこの地上に来てくださったということを知ることは御言葉を信頼するということにつながる。

イエスさま誕生の予告

もうすぐクリスマスです。街はすっかりクリスマスにむけて彩られています。でも、クリスマスはイエス様の御誕生をお祝いする日であるということを、この礼拝を通して思い出したいと思います。

今日はイエス様のお母さんであるマリアが登場してきます。マリアは神様を熱心に信じていました。それでも特別な人ではありません。田舎にあるナザレという街にすんでいる、ごくごく普通の女性でした。マリアにはヨセフという婚約者がいました。そんなマリアさんにとって驚くべき出来事が起きたのです。それはある日、いつもと変わらない生活を送っていたマリアさんのところに、ガブリエルという天使が訪れたのです。天使とは、神様の使いです。神様からのメッセージ、伝言を運ぶ人のことです。ガブリエルは神様からの特別なメッセージを預かってマリアのところに來たのです。「マリア、おめでとう。あなたは神様から祝福されています」。天使はこのようにマリアに告げました。さらに天使は続けます。あなたは「男の子を産みますよ」とマリアに対して語ったのです。さらにマリアが産む男の子はただの男の子ではありません。それは旧約聖書の時代から人々が楽しみに待っていた人物だということです。当時の

人々は神様の代わりに人々を導いて、助けてくれる救い主の存在を心待ちにしていました。マリアが産むこどもはまさにこうした救い主だと天使はいったのです。人々を罪から救い、人々をずっと治め、守ってくださる。こうした王様が、マリアを通してあたえられるのですよ。天使はこのようにマリアに告げたのです。

マリアさんはこのメッセージを聞いて驚きました。マリアはこどもを産む予定はなかったからです。マリアはヨセフとまだ一緒にすんでいなかったのでこどもができるわけではありません。ですから、マリアは天使にむかって「そんなことはありませんよ」と告げたのです。

ところが、天使はさらにマリアに話しかけます。マリアは驚きました。なぜならば、マリアがこどもを産むということは人間の常識をこえたあり得ない方法によるのです。それは聖霊なる神様の力だと天使はいいました。神様の不思議な力につつまれて、マリアはこどもを産むのです。マリアは確かにこどもを産むのです。しかしそれはヨセフとの間にできるこどもではなくて、神様の力によって誕生する特別なこどもです。そのこどもは特別に聖められていて、罪のない仕方でお生まれになるのです。このお方こそ、イエス・キリスト

です。

クリスマスはイエスさまの誕生をお祝いするときですね。そして今、イエス様のお誕生が天使によって予告されたことを学びました。ところでみなさんイエス様の名前の意味を知っていますか。イエス様のイエスってね、「主は救い」という意味なんです。主なる神様は私たちを救ってくださるということなんです。まさに、イエスさまにぴったりの名前だと思いませんか。イエス様は私たちを罪から救ってくださり、そして王様として導いてくださるお方です。そのイエス様の御誕生は最初から最後まで、神様の力で守られていたんですよ。

イエスさまを産むことになると告げられたマリアは戸惑いながらも、天使の言葉を神様の言葉として受け入れました。「神様の言葉どおりになりますように。私の身に何が起こっても、神様のこ

とを信頼します」マリアはこのようにいったんです。

マリアは神様の御言葉を心の底から信じました。そして、信頼しました。そのようなマリアを神様は最後までお守りくださり、マリアは無事に男の子を産みました。それが、イエス・キリストですね。

なんで神様がマリアを選んだのか、わかりません。でも、一つ確かなことはマリアは神様の言葉を信頼する人でした。このようなマリアを神様は祝福してくださったのです。今を生きる私たちは、マリアのように救い主を産むことはできません。しかし、マリアのように御言葉を信じることはできます。これはいつの時代にも変わらない祝福です。この祝福を握りしめて、クリスマスまで歩みましょう。
(小宮山裕一)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 1章38節

マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」
そこで、天使は去って行った。



〈ねらい〉

今週、来週はイエスキリストの誕生を、ルカ独自の聖書記事（マリアへの受胎告知、羊飼いの登場）によって学ぶ。貧しい者が高められ、大きな役割を与えられることは、ルカの救いの神学の中心でもある。我々は現代の頭でみ言葉に触れている。人権も生まれながら当然のごとく与えられていて、それ以外の状況を知らない。当時の時代背景を説明されてもなかなか理解できないのである。少しずつでも聖書の時代を学んで、より深く聖書を読むことができるようにしていきたい。特に今週は受胎告知をされるマリアを中心に、ザカリアと比較をしながらマリアの信仰に注目しつつ考察したい。

～天使からそれぞれ告知されたマリアとザカリアについて～

子供たちと対話形式で話を進行させていきたい。

1. マリアとザカリア両者の当時の身分の違い

* マリア＝「一介の田舎の小娘」(神原康夫、1972聖書講解ルカの福音書 P30)

無学、社会立場も当然低い。

* ザカリア＝祭司（聖職者）

当時、祭司はユダヤの指導的階級。王家は廃れていた。⇒マタイ1:18～25参照、ダビデの子孫が田舎のナザレで大工であった。

この様に両者の間にはこの世的には、大きな隔りがあったのである。

2. 天使から告知を受けた内容はそれぞれどんなことであったか？ また両者はどう対応したか？

天使の告知

* マリア＝1:26～33

* ザカリア＝1:13～17

両者の対応と結果

* マリア＝1:34、1:38

理解ができないので、聞き返したが、素直に信じ身を献げた。

* ザカリア＝1:18

しるしを求めた。口が聞けなくなる。

⇒この両者の違いはどこにあったのかを、子供たちと考えたい。

(例えば)

- ① どうして、立派な祭司で当時のユダヤ人の指導的階級であったザカリアより、マリアのほうが天使の言葉を素直に受け入れたのか？
 - ② 初代教会の人たちはどういう気持ちで読んだのだろうか？
 - ③ 信仰ってなんだろうか？（ヘブライ11:1）
- 等々。

対話の手掛かりとして……

- ① イエス・キリストの母となったマリアは、聖書の登場人物の中でも、特別な存在として、カトリックなどでは、礼拝の対象にもなっています。プロテスタントでは、そのようなことはいたしません。しかし、マリアの信仰の姿に倣うことはできるでしょう。そして、マリアだけが特別美しい存在だというのではなくて、私たちもまたマリアのような美しい信仰に生きることへと招かれているのではないのでしょうか。
- ② 大人ではなく、「少女」と言った方が相応しいマリアに、天使が告げたことは、驚くべき内容でした。戸惑いと恐れ、そして不安が彼女の心に一気に襲いかかります。決して、自分は神の子を宿すような立派な人間ではありません。まだ結婚していないにもかかわらず、赤ちゃんを身ごもるといってはならないことが、自分の身に起こっているというのです。当時の掟にしたがえば、このことは死に値しました。そんなマリアを支えたのは、ただ神様の言葉だけでした。他には何も無いのです。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」(ルカ1:38)。ここにマリアの美しさの一つがあるのではないのでしょうか。私たちが頼るべきもの、それは神様の言葉だけです。マリアは学識高い聖書学者でもありません。周りから尊敬されるような立派さに生きていたわけでもないでしょう。豊かな財産も高い地位も彼女には無縁でした。しかし、そうであるがゆえに、神様の言葉に自分を委ねたのです。
- ③ 神様の言葉が、自分の中に実現していくことの中に、私の幸いがあると信じていたマリアは、「わたしは主のはしためです」と告白しています。「はしため」というのは、「女奴隷」という意味です。奴隷が主人に仕えるように、私も主

にお仕えしていきますと信仰を言い表わしています。自分が主人になるのではなく、奴隷(しもべ)として主に仕えていく姿に、人間の本当の美しさがあるのです。また、46節以下には、「マリアの賛歌」と呼ばれる歌が記されています。マリアは、「わたしの魂は主をあがめ……」と歌い始めます。「あがめる」という言葉は、ラテン語で「マグニヒカート」、日本語で「大きくする」という意味です。自分を大きくするのではなく、神様を大きくしていくのです。たとえ、ちっぽけな私であっても、神様の名があがめられるとき、神様の憐れみが注がれていること、それほどに神様の目に尊い存在であることができるのです。

- ④ 「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らせていた。」(ルカ2:19) 羊飼いたちは、自分たちの身に起こったことを幼子イエスの周りにいた人たちに話します。他の人たちは、いったい何のことかさっぱりわかりません。しかしその中で、マリアだけが、クリスマスの出来事を心に納めて、思い巡らせていたのです。受胎告知から始まり、ベツレヘムまでの長い道のり、そして最後には家畜小屋でイエス様を産むこととなります。恐れ、不安、疲れ、悲しみ、痛みなど、イエス様を産むまでに、本当に心揺らぐ日々だったに違いありません。しかし、その中に、「主が共にいてくださる」(ルカ1:28)ということが確かであることを知りました。神様の言葉は必ず実現する。「神にできないことは何一つない」(ルカ1:37)ということ、マリアは経験しました。クリスマスの時、私たちもそれぞれに、主がしてくださったことを、心に納め、静かに思い巡らす時を過ごしたいと思います。そこに生まれてくる御言葉の実り期待しましょう(詩編1、イザヤ55:10~11)。